

2. 事業の概要と成果	
(1) 上位目標の達成度	<p><u>上位目標：事業対象地における小児結核の被害が減少する。</u></p> <p>【達成傾向】</p> <p>中心 6 地区における 2011 年と 2012 年の 3 月～12 月まで 10 カ月間の新規小児患者数を比較すると、下記の通り、減少傾向が見られる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 新規小児患者数 (10 ヶ月間平均)： <li style="padding-left: 2em;">41.7 名 (2011 年) <li style="padding-left: 2em;">40.1 名 (2012 年)
(2) 事業内容	<p><u>活動 1：小児への結核感染予防サービスの拡大</u></p> <p>12 月末までに対象 18 地区で延べ 103,140 名(中心 6 地区で 87,464 名、新規 12 地区 15,676 名)の地域住民が結核予防教育を受けた。同教育は、各家庭や市場などにおいて、結核治療サポーターによってパンフレットなどを用いて行われた。また 1) 喀痰陽性患者が同居している小児、2) HIV 陽性の小児、3) 低栄養状態の小児といったハイリスクグループにアクセスするため、各保健センターの結核コーナー、ART (エイズ治療) コーナー、栄養コーナー、外来などで行われた。毎月各保健センターの上記箇所において平均 16 回開催され、2013 年 1 月末までに延べ 37,687 名が保健教育を受けた。また、保健センター内だけでなくコミュニティにおいても延べ 13,315 名が教育を受け、総合計は 51,002 名となる。</p> <p>また、現地で人気の高いラジオ局「5 FM (Five FM)」(FM89.9) を通じ、毎週一回 30 分の結核啓発のラジオ番組をルサカ市全域へ放送することで、広く一般市民が結核の情報を得る機会を提供した。さらに、各保健センターの結核コーナーや外来受付などに CD ラジカセを置き、本事業のラジオ放送を生放送で聞くとともに、CD に録音したものを繰り返し流した。</p> <p>予防投薬は、感染力の強い新規喀痰患者と同居している小児を対象に行うものであり、本事業はルサカ市保健局の政策に沿って、各保健センターでの実施を支援した。フェーズ 1 より予防投薬を実施していたジョージ地区とカニヤマ地区では、2012 年 3 月から 2013 年 1 月までに 137 人が予防投薬を開始し、うち 60 人がすでに投薬を完了した。その他 4 地区においても、予防投薬の進め方についての研修を行い、必要な薬や台帳も配備され、予防投薬を実施できる環境が整った。マケニ地区では、すでに 12 月から予防投薬が開始され、12 月から 1 月までに 8 人が投薬を開始した。他の 3 地区においても、予防投薬の対象となる患者のスクリーニングが開始された。</p> <p><u>活動 2：小児結核患者の早期診断強化</u></p> <p>診断能力の強化のために、人材の育成と必要物資および搬送サービスの提供を行った。まず、人材育成の面では、ザンビア教育大学附属病院 (UTH) の小児科医であるランゴ・シンベイエ医師とチェルストン保健センター (チャザンガ保健センターも兼任) のシャルロット・カセンパ医師が 10 月に南アフリカのデズモンド・ツツ結核センターにおける 1 週間の研修 (International Childhood TB Training</p>

Conference) を受講し、小児結核の診断について理解を深め、その知識を日ごろの業務で活用している。さらに、彼らが保健センタースタッフに実地研修を行うとともに、結核治療サポーターの研修にも講師として参加し、小児結核の早期診断のための人材育成にも貢献している。

5月、10月、12月と3回にわたり、小児結核のワークショップが実施され、中心6地区だけでなく、ルサカ市の21の保健センターより医療スタッフの少なくとも1名が参加した。研修では、ルサカ市保健局のスタッフや南アでの研修を受講したUTHの小児科医師が講師となり、世界的な小児結核の潮流、ザンビアにおける現状と政府の方針、治療現場での診断の実践について講義とワークショップによって、知識と技術を身につけることができた。

一方、6地区の診断センター（診断機能を備えた保健センター）のうち、喀痰検査を行えるのは5か所（マケニ以外）、さらに胸部レントゲン撮影も行えるのはチャワマとマテロ・リファレンスの2か所だけであるが、そのすべてのセンターへ喀痰検査キット、X線フィルムを供給し、その結果、常時検査が行える状態であることが確認された。

2月末までに延べ156名の患者が、本事業が支援するリファラルサービスにより、UTHや他の診断機能を備えた保健センターへ搬送された。低年齢で喀痰を出せない小児や肺外結核の小児などUTHでの診断が必要なケースにはほぼすべて対応できたものと考えられる。

活動3：結核患者のコミュニティDOTSの徹底

本事業による支援を通じて、2012年3月から2013年1月までに合計307名が治療を完了した。完了できなかったケースは死亡のケース6件、および脱落者2件の合計8件であった。昨年の同期間の数字が死亡14件、脱落者10件であったことと比較すると、完了率を高めているものと言える。これには、小児に特に注意を払った家庭訪問、栄養教室、患者集会、さらには治療卒業式など、サポーターを中心とした取り組みが貢献しているものと考えられる。また、中心6地区で自転車不足していたカニヤマ保健センターと新規12地区の保健センターへ合計50台の自転車（うち自己資金15台）を供与したが、サポーターの家庭訪問活動等に活かされている。

さらに、本事業は結核患者の治療を支援するため、ジョージとチャワマの保健センターの結核コーナーに待合室を整備した。また対象18地区の保健センターに扇風機を供与し、通気性を高めるなど、環境の改善が図られた。サポーターの継続した活動に加え、こうしたニーズに沿った取り組みが治療完了を高めることに貢献していると考えられる。

また、本事業では、各保健センターにおいて喀痰検査キットが不足しないよう、ルサカ市保健局から各センターへの供給システムの強化も図った。これまで複数の援助団体が直接各保健センターへ供

給していたため、市保健局の管理下で供給されていなかった。本事業は、ルサカ市保健局に検査キットを供与し、同局から各診断センターへ供給できるシステムの強化を支援した。ルサカ市保健局の担当者と各保健センターとのコミュニケーションを支援することで、各保健センターで検査資材が不足しない状況が維持されるようになった。

さらに、結核治療の徹底に欠かせないデータ管理の能力強化への支援も行った。4月、9月に各2日間、さらに11月に1日間のデータマネジメントワークショップを開催し、各保健センターより最低1名が参加した。同ワークショップの実施により、現在は結核患者の台帳、カルテ、報告書の各データの理解を深め、実際の報告書のデータの不備や間違いを確認し、正しく記入・報告できるようになっている。また、中心6地区のうちコンピューターを所有していなかった4地区（カニヤマ、マケニ以外）、更に新規12保健センターのうち5か所へノートパソコンとプリンターを供与し、パソコン研修も実施した。ルサカ市保健局によると、データマネジメント研修の結果、各保健センターからの報告が早くなり、10月～12月の四半期報告書を通常より1ヶ月早く完成・提出でき、さらに複数の保健センターにおいて、データの質が向上したことが指摘されている。研修の波及効果として総登録患者数をカウントし直す必要性が指摘され、再カウントした結果妥当な数値となったためである。

活動4：低栄養状態にある小児結核患者を対象とした栄養支援サービスへのアクセスの改善

3月～12月までに小児結核患者496名とその保護者453名の合計949名が栄養教室に参加したが、うち113名（以上延べ人数）が低栄養であった。小児患者496名に対してその91%にあたる453名の保護者が栄養教育を受けたこととなる。また、治療卒業式に参加した保護者154名のうち152名（99%）が結核治療期間中に栄養教育を受けたと回答した。

上記教室にて低栄養状態にあると診断された113名の全員が月2回HEPS（大豆をベースにした栄養補助食品）の提供を受けた（HEPSの調達は当団体自己資金による）。

活動5：結核治療サポーターの役割と持続性の強化

フェーズ2より新たに対象となった全12地区においてそれぞれ5日間の研修が終了し、合計118名のサポーターを育成した。対象者は過去に研修を受けたものの再教育が必要だったケースと、新しくサポーターとして育成されたケースの両方である。研修は、結核の感染や治療の方法、薬の副作用、小児結核、HIV/エイズとの関連性などの知識に加え、保健センターでのサポーターの業務内容、家庭訪問、保健教育、患者の追跡調査などの実務の技術を身につけられる内容となっている。また、全18地区のサポーターに対してリフレッシュ研修（中心6地区は3日間×2回、新規12地区は3日間×

	<p>1回)を実施し、合計272名のサポーター(病欠者を除くほぼ全員)が参加した。リフレッシュ研修は、新規研修の内容を簡潔に復習しつつ、結核やエイズに関する新たな情報を提供したり、日ごろの課題について共有し解決策を検討したりする内容となっている。</p> <p>中心6地区の結核治療サポーターが、自分たちで立案したコミュニティでの結核啓発活動、月例集会、患者治療集会の年間計画を予定通りに実施できていることが、サポーターの活動記録(保健教育、家庭訪問報告書など)によって確認された。</p> <p>また、9月以降、中心6地区の間や6地区と新規12地区との間で、結核看護師と治療サポーターが相互訪問し、活動の見学や共に活動するなどの交流が行われた。これにより、中心6地区の経験が新規12地区にも共有され、それをもとに活動が計画されている。さらに、1月には全18地区のサポーターが一堂に会するサポーター総会が開催され、サポーター間のネットワークが強化されるとともに、ルサカ市保健局をはじめ結核・エイズに関わる活動を行うNGOなどステークホルダーの連携が強化される機会となった。</p> <p>また、治療を完了した(治療卒業式に参加した)患者154名へのアンケート調査において、全員がサポートに満足していると回答した。</p>
(3) 達成された効果	<p>プロジェクト目標：事業対象地のコミュニティにおける小児結核対策サービスが拡充する。</p> <p>指標1：中心6地区にて小児結核ハイリスクグループが結核対策にアクセスする機会が増える。</p> <p>【達成】</p> <p>① 喀痰陽性患者と同居している小児については、ジョージとカニヤマの2地区において予防投薬が実施され、137名が予防投薬を開始し、60名が投薬を完了した。前年に予防投薬を開始したのが15名であったことと比較すると、予防投薬へのアクセスが増加したと言える。さらに、4地区においても8名が予防投薬を開始し、小児の予防投薬スクリーニングが実施され、予防投薬へアクセスできる小児が増加することが期待できる。</p> <p>② HIV陽性の小児については、各保健センターのART(エイズ治療)コーナーにおいて予防教育を実施し、3月～1月の11ヶ月間で6,046名(月平均550名)が同教育にアクセスできた。フェーズ1では、4ヶ月間で1,055名(月平均263名)であったため、アクセスできた人数は月平均で倍以上となった。</p> <p>③ 低栄養の小児については、本年より新たに栄養コーナーでの結核予防教育を開始し、1,706名が同教育にアクセスできた。また、フェーズ1の一年間(実質11ヶ月間)に料理教室及び食糧支援を通じてアクセスできた数が87名であったのに対し、フェーズ2では3月から12月の10ヶ月で113名とその数が3割近く増加した。</p>

	<p><u>指標 2：中心 6 地区において、小児結核患者が診断までにかかった平均期間が短縮する。</u></p> <p>【達成】 小児結核治療卒業式の参加者 154 名へのアンケート調査によると、各月の診断までの平均所要時間は、下記の通り短縮されている。 2011 年： 8.3 ヶ月 2012 年： 5.2 ヶ月 特に、9 月～11 月の 3 ヶ月では、すべて 4 ヶ月未満となっている。</p> <p><u>指標 3：ルサカ市内の全保健センターが結核データを毎月ルサカ市保健局へ報告できる。</u></p> <p>【達成】 各保健センターの月例報告は翌月 7 日までにルサカ市保健局へ報告されることとなっている。多少の遅れは見られるが、毎月の報告がなされている。また、ルサカ市保健局によると、各保健センターからの報告が早くなったため、10 月～12 月の四半期報告書をこれまでより 1 ヶ月早く完成・提出できたという成果もあった。</p> <p><u>指標 4：中心 6 地区で小児結核の治療脱落患者数が増加しない。</u></p> <p>【達成】 2011 年 3 月～12 月の小児の治療脱落者が合計 10 件であったのに対し、2012 年の同期間では 2 件へと減少した。</p>
(4) 持続発展性	<p>本事業は保健行政の結核対策を強化するものであり、またザンビア国保健省ならびにルサカ市保健局が重点課題の一つとして結核対策を進めていくことは各種政策文書でも確認されており、本事業の支援の成果が今後のルサカ市の結核対策において活かされることが期待できる。また、同対策に欠かせない結核治療サポーターについても、フェーズ 1 終了時における定着率も非常に高く、5 年から 10 年もの長期間サポーターとして活動に従事しているものも少なくないことから、本事業終了後も彼らが一定のレベルで活動を継続していくことは十分に期待できる。車両を用いた搬送サービスについても、車両の譲渡とともにルサカ市保健局と同サービスの継続に係る合意書が結ばれた。特に、結核事業活動を維持していくために各保健センターに対して今後もルサカ保健局がモニタリングの強化を図ること、また結核小児患者の搬送サービスを行っていくことなどが盛り込まれ、ルサカ市保健局の主導により活動の持続性が確保されると考える。</p> <p>本事業で 2 つの保健センターの結核コーナーに設置した待合所は、ルサカ市保健局ならびに当該保健センターの管理のもと、患者が雨や強い日差しにさらされず安心して待つことのできる場として、また、待ち時間を利用したサポーターや看護師による結核やエイズなどの保健教育の場として有効に活用されており、今後も継続して活用されることが期待できる。また、データ管理ワークショップ</p>

	<p>プに参加した全18保健センターの結核コーナーのうち中心6地区とその他5地区合計11地区において 看護師とサポーターに対して PCの基本操作のトレーニングを受講後、PCとプリンターが配布された。これらはルサカ市保健局のアセットとして管理され、担当官により結核患者データの電子化の計画に沿って データ入力のアドバイスが行われることになっている。事業終了時の各保健センターからの報告書や今年度の活動計画など、これまで手書きだったものがタイプされ、表にまとめるなど事業の効果がみられており、今後も継続していくものと期待される。</p>
--	--